

米国の発表による、真珠湾攻撃における被害状況

1941年12月7日（日曜日）

真珠湾攻撃

第二次世界大戦のアジア太平洋戦線の一部

真珠湾攻撃日本機view.jpg

攻撃開始時に日本の砲から撮影したバトルシップロウの写真。中央の爆発は、USSウェストバージニアでの魚雷攻撃です。

2つの攻撃している日本の飛行機を見ることができます：1つはUSSネオショーの上に、もう1つは海軍ヤードの上にあります。

日付1941年12月7日

位置 オアフ島、ハワイ準州、米国

結果 日本の勝利;

連合国側の第二次世界大戦への米国の参入を促進した

司令官と指導者

ハズバンド・キンメル

ウォルターショート

ロバートA.テオバルド

山本五十六

南雲忠一

淵田美津夫

関係するユニット

アメリカ合衆国太平洋艦隊

大日本帝国第一航空艦隊

戦果 8隻の戦艦 8隻の巡洋艦 駆逐艦30隻 4隻の潜水艦 3つのUSCGカッター
他の47隻 航空機390機 6隻の空母 重巡洋艦2隻 軽巡洋艦1隻 駆逐艦9隻 タンカー8隻
23隻の艦隊潜水艦 5隻の特殊潜航艇

414機（353機が襲撃に参加） 死傷者と損失 4隻の戦艦が沈没 4隻の戦艦が損傷
元戦艦1隻が沈没 1つの港のタグボートが沈んだ 3隻の巡洋艦が損傷した
駆逐艦3隻が損傷 他の3隻の船が損傷した 188機が破壊された 159機の航空機が損傷した
2,335人が死亡 1,143人が負傷 4隻の特殊潜航艇が沈没 1隻の特殊潜航艇が接地
29機が破壊された 74機が損傷 64人が死亡
1人の船員が捕らえられた 民間人の死傷者 68人が死亡 35人が負傷した 3機が撃墜

真珠湾攻撃]は、日曜日の08:00直前に、ハワイ準州ホノルルの真珠湾攻撃基地に対する大日本帝国海軍航空隊による米国への奇襲軍事攻撃でした。

1941年12月7日。当時、米国は中立国でした。

攻撃で翌日第二次世界大戦への正式な参入につながりました。

日本の軍事指導部は、この攻撃をハワイ作戦と作戦AIと呼び、計画中は作戦Zと呼んだ。

日本はこの攻撃を予防措置として意図していた。

その目的は、米国太平洋艦隊が、英国、オランダ、および米国の海外領土に対する東南アジアでの計画された軍事行動に干渉するのを防ぐことでした。

7時間の間に、米国が保有するフィリピン、グアム、ウェーク島、およびマラヤ、シンガポール、香港の大英帝国に対する日本の攻撃が調整されました。

攻撃はハワイアンタイムの午前7時48分（グリニッジ標準時18時18分）に開始されました。

6隻の空母から発射された2つの波。

存在する8隻の米海軍戦艦のうち、4隻が沈没し、すべてが損傷を受けました。

USSアリゾナを除くすべてが後に引き上げられ、6人がサービスに復帰し、戦争で戦い続けました。

日本人はまた、巡洋艦3隻、駆逐艦3隻、対空練習船、機雷敷設艦1隻を沈没または損傷させました。

合計188機の米国の航空機が破壊されました。

2,403人のアメリカ人が殺され、1,178人が負傷した。

発電所、乾ドック、造船所、メンテナンス、燃料および魚雷の貯蔵施設などの重要な基地設備、潜水艦の埠頭と本部の建物（これも諜報部門の本拠地）は攻撃されませんでした。

日本軍の損失は軽微でした。29機の航空機と5隻の特殊潜航艇が失われ、64人の軍人が死亡しました。

ある潜水艦の指揮官である酒巻和男が捕らえられた。

日本はその日遅く（東京では12月8日）に米国と大英帝国に対する宣戦布告を発表したが、宣戦布告は翌日まで行われなかった。

英国政府は、自分たちの領土も攻撃されたことを知った直後に日本に宣戦布告し、翌日（12月8日）には米国議会が日本に宣戦布告しました。

12月11日、日本との三者協定の下でそうする正式な義務はなかったが、ドイツとイタリアはそれぞれ米国に対して宣戦布告し、ドイツとイタリアに対する宣戦布告を行った。

日本による未発表の軍事行動には多くの歴史的先例がありましたが、特に和平交渉がまだ進行中であるように見える間、正式な警告がなかったため、フランクリンD.ルーズベルト大統領は12月7日を宣言しました。

1941年、「悪名高い日に生きる日」。宣戦布告も明示的な警告もなしに攻撃が行われたため、真珠湾攻撃は後に東京裁判で戦争犯罪であると判断されました。

1.1外交の背景

1.2軍事計画

1.3目的

2アプローチと攻撃

2.1潜水艦

2.2日本の宣戦布告

2.3最初の波の構成

2.4第2波の構成

2.5アメリカ人の死傷者と被害

2.6日本の損失

2.7考えられる第3波

3船の紛失または破損

3.1戦艦

3.2元戦艦（ターゲット/ AA練習船）

3.3巡洋艦

3.4駆逐艦

3.5補助

4サルベージ

6余波

紛争の背景

主な記事：真珠湾攻撃につながるイベント

外交の背景

日米間の戦争は、1920年代以降、各国が認識し、計画していた可能性でした。

日本は1890年代後半から太平洋とアジアでのアメリカの領土と軍事の拡大に警戒しており、その後ハワイやフィリピンなどの島々が併合され、勢力圏に近いか、その範囲内にあると感じていた。

日本は人種的差別撤廃提案を拒否した後、米国に対して敵対的な政策を取り始めたが、両国の関係は十分に誠実であり、貿易相手国であり続けた。

日本が1931年に満州に侵攻するまで、緊張は深刻に高まりませんでした。

次の10年間で、日本は中国に拡大し、1937年に日中戦争を引き起こしました。

本土で勝利を収める。「南部作戦」はこれらの努力を支援するために設計されました。[

1941年10月30日の真珠湾攻撃。南西を向いています。フォード島がその中心にあります。

1937年12月以降、USSパナイ号に対する日本の攻撃、アリソン事件、南京大虐殺などの事件は、日本に対する西側の世論を大きく揺さぶった。

アメリカは日本を封鎖するためにイギリスとの共同行動を提案することに失敗した。

1938年、ルーズベルト大統領の訴えを受けて、米国企業は日本に戦争の道具を提供することをやめた]。

1940年、日本はフランス領インドシナに侵攻し、中国に到達する物資の流れを妨害しようとしていました。

米国は、日本への飛行機、部品、工作機械、および航空機用ガソリンの出荷を停止しましたが、日本はこれを不親切な行為と見なしていました。

日本がアメリカの石油に依存していることを考えると、そのような行動は極端な挑発と見なされる可能性が高い。

1940年代半ば、フランクリンD.ルーズベルト大統領は太平洋艦隊をサンディエゴからハワイに移しました。

彼はまた、フィリピンでの軍事力増強を命じ、極東での日本の侵略を思いとどまらせることを期待して両方の行動をとった。

日本の最高司令部は、シンガポールを含むイギリスの東南アジア植民地への攻撃が（誤って）確実であったため、アメリカを戦争に巻き込むだろう。

日本の戦争計画者は、フィリピンへの侵攻も必要であると考えていた。

オレンジ計画は、40,000人のエリート部隊でフィリピンを守ることを想定していた。

このオプションは、ダグラス・マッカーサーがその10倍の力が必要だと感じたために実装されませんでした。

1941年までに、米国の計画立案者は戦争の勃発でフィリピンを放棄することを期待していました。

その年の終わりに、アジア艦隊の指揮官であるトーマス・C・ハート提督がその趣旨の命令を与えられた。

アメリカは1941年7月にフランス領インドシナの押収に続いて、国内の石油消費に対する新たなアメリカの規制もあって、ついに日本への石油輸出をやめた。

この決定により、日本は石油が豊富なオランダ領東インドを占領する計画を進めた。

8月17日、ルーズベルトは、「近隣諸国」が攻撃された場合、アメリカは反対の措置を講じる用意があると日本に警告した。

本人はジレンマに直面しました、中国から撤退して顔を失うか、東インドアジアの資源が豊富なヨーロッパの植民地で新しい原材料の供給源をつかむかのどちらかです。

日米は1941年に交渉を行い、関係の改善を図った。

これらの交渉の過程で、日本は国民政府と和平を結んだ後、中国とインドシナの大部分から撤退することを申し出た。

また、他のすべての国が往復することを条件として、三国同盟の独立した解釈を採用し、貿易差別を控えることを提案した。

ワシントンはこれらの提案を拒否した。その後、近衛文麿首相はルーズベルトとの会談を申し出たが、ルーズベルトは会談前に合意に達することを主張した。

和解する近衛政府と太平洋の平和を維持する唯一の方法。[42] しかし、彼の推薦は実行されませんでした。

11月20日に提出された日本の最終提案は、米国、英国、オランダが100万米ガロン（380万リットル）の航空燃料を供給している限り、インドシナ南部から撤退し、東南アジアでの攻撃を控えることを提案した。

日本に対する制裁を解除し、中国への援助をやめた。

11月26日（日本では11月27日）のアメリカの反対提案は、日本が無条件で中国を完全に避難させ、非侵略を締結することを要求した。

太平洋諸国との協定。ノートが配達される前日の11月26日、日本のタスクフォースは真珠湾に向けて出港しました。

日本人は、米国太平洋艦隊が英国、オランダ、米国の海外領土に対して東南アジアで計画されている軍事行動に干渉するのを防ぐための予防措置として攻撃を意図した。

7時間の中に、米国が保有するフィリピン、グアム、ウェーク島、およびマラヤ、シンガポール、香港の大英帝国に対する日本の攻撃が調整されました

また、日本の観点からは、「オイルゲージが空になる前に」先制攻撃と見なされていた>

山本五十六海軍提督の後援により、1941年の早い時期に「南資源地域」（オランダ領東インドと東南アジアの総称）への移動を保護するための真珠湾攻撃の予備計画が開始され、その後、日本の連合艦隊。

彼は、彼の指揮を辞任するという脅迫を含む、海軍本部との多くの論争の後にのみ、大日本帝国海軍参謀からの攻撃のための正式な計画と訓練に同意した。

源田実大尉と山本副首席補佐官黒島亀人大尉の協力を得て、1941年春初頭までに草鹿龍之介大將を中心に本格的な計画が進められた>

計画立案者は、ターラントでのイタリア艦隊に対する1940年の英国空襲を集中的に研究しました。

次の数か月にわたって、パイロットが訓練され、機器が適応され、インテリジェンスが収集されました。

これらの準備にもかかわらず、昭和天皇は、4回の帝国会議の3回目が問題を検討するよう求めた後、11月5日まで攻撃計画を承認しなかった。

日本の指導者の大多数が「ハルノート」が「中国の事件の成果を破壊し、満州国を危険にさらし、日本の韓国の支配を弱体化させる」と彼に忠告した後、12月1日まで皇帝によって最終的な承認は与えられなかった。

1941年後半までに、多くのオブザーバーは、日米間の敵対行為が差し迫っていると信じていました。

真珠湾攻撃直前のギャラップの調査によると、アメリカ人の52%が日本との戦争を予想し、27%が予想していなかったし、21%が意見を持っていなかった。

米国太平洋の基地と施設は多くの場合警戒態勢に置かれていましたが、米国当局はパールハーバーが最初の標的になるのではないかと疑っていました。

代わりに、彼らはフィリピンが最初に攻撃されることを期待していました。

この推定は、全国の空軍基地とマニラの海軍基地がシーレーンに与える脅威と、領土から南への日本への物資の輸送によるものでした。

彼らはまた、日本は一度に複数の主要な海軍作戦を実施することができなかった。

日本の攻撃にはいくつかの主要な目的がありました。

第一に、それは重要なアメリカ艦隊ユニットを破壊することを意図し、それによって太平洋艦隊がオランダ領東インドとマレーシアの日本の征服に干渉するのを防ぎ、日本が干渉なしに東南アジアを征服できるようにした。

第二に、1940年のヴィンソン・ウォルシュ法によって認可された造船が勝利のチャンスを消す前に、日本がその地位を固め、海軍力を強化するための時間を稼ぐことが望まれた。

第三に、太平洋でその軍隊を動員するアメリカの能力に打撃を与えるために、戦艦は当時の海軍の名門艦であったため、主な標的として選ばれた。

最後に、攻撃がアメリカの士気を損ない、アメリカが真珠湾の錨泊地で太平洋艦隊を攻撃することには、2つの明確な欠点がありました。

対象となる船は非常に浅い海域にあるため、救助と修理が比較的容易であり、多くの乗組員が攻撃に耐えられるため、ほとんどの乗組員は攻撃に耐えることができます。

岸を離れるか、港から救出されるでしょう。

さらに重要な不利な点は、米国太平洋艦隊の3隻すべての空母（エンタープライズ、レキシントン、サラトガ）が真珠湾にないことでした。

IJNの最高司令部は、マハン提督の「決定的な戦い」の教義、特に最大数の戦艦を破壊するという教義に付随していました。

これらの懸念にもかかわらず、山本は前進することを決心した。

短い勝利の戦争を達成する能力に対する日本の自信は、港の他の目標、特に海軍造船所、石油タンク農場、潜水艦基地も無視されたことを意味しました。

なぜなら、彼らの考えでは、戦争は影響を受ける前に終わったからです。

これらの施設の中で感じられるでしょう。

空母赤城の大日本帝国海軍三菱A6Mゼロ戦闘機。

1941年11月26日、赤城、加賀、総竜、飛龍、翔鶴、瑞鶴の6隻の空母からなる日本の機動部隊（打撃部隊）が、途中、クリル諸島のカサトカ（現在のイテルプ）島のヒトカブ湾を出発しました。

ハワイの北西の位置に、真珠湾を攻撃するために408機の航空機を発射する予定です。

2つの攻撃波で360機、最初の波からの9機の戦闘機を含む防御戦闘空中哨戒（CAP）で48機です。

第1波は一次攻撃であり、第2波は第1目標として空母を攻撃し、第2目標として巡洋艦を攻撃し、第3目標として戦艦を攻撃しました。

最初の波は、主力艦を攻撃するためにほとんどの武器を運びました。

主に、浅瀬で動作できるようにアンチロールメカニズムと舵延長を備えて設計された特別に改造されたタイプ91航空魚雷です。

搭乗員は、最も価値の高いターゲット（戦艦と空母）、またはこれらが存在しない場合は他の価値の高い船（巡洋艦と駆逐艦）を選択するように命じられました。

第一波の急降下爆撃機は地上の標的を攻撃することでした。

戦闘機は、特に第1波で、爆撃機を迎撃するために空中に出ないように、できるだけ多くの駐機中の航空機を攻撃して破壊するように命じられました。

戦闘機が燃料が少なくなったので、空母で燃料を補給して戦闘に戻りました。

戦闘機は、特に米国の飛行場で、必要に応じてCAPの任務を遂行することになっていた。

攻撃が始まる前に、大日本帝国海軍は巡洋艦チクマとトーンから偵察フロート水上機を発射し、一方はオアフ島を、もう一方はマウイ島のラハイナローズを偵察し、米国の艦隊の構成と場所について報告するよう命じました。

偵察航空機の飛行は米国に警告する危険があり[62]、必要ではなかった。真珠湾での米国の艦隊構成と準備情報は、日本のスパイ吉川猛夫の報告によりすでに知られていました。

マウイ島沖のラハイナ停泊地に米艦隊がないという報告は、トーンのプロート水上機と艦隊潜水艦I-72から受け取った。

別の4機の偵察機が日本の空母部隊（キドウブタイ）とニイハウの間のエリアをパトロールし、反撃を検出した。

艦隊潜水艦I-16、I-18、I-20、I-22、およびI-24はそれぞれ、オアフ島沖への輸送のためにタイプAのミゼット潜水艦に乗り出しました。

5隻のIボートは1941年11月25日に呉海軍地区を出港した。

12月6日、彼らは真珠湾の河口から10 nmi（19 km; 12 mi）以内に到着し、12月7日の現地時間01:00頃に特殊潜航艇を進水させた]。

03:42ハワイアンタイムに、掃海艇コンドルは真珠湾攻撃ブイの南西にある特殊潜航艇の潜望鏡を発見し、駆逐艦ワードに警告した。

しかし、ワードは太平洋戦争での最初のアメリカのショットで06:37に別の特殊潜航艇を沈めました。

3番目の特殊潜航艇Ha-19は、2回着陸し、1回は港の入り口の外に、もう1回はオアフ島の東側に着陸し、12月8日に捕獲されました。

酒巻和男少尉が上陸し、ハワイ国防軍のデイビッド・アクイ将軍に捕らえられ、日本軍の最初の捕虜となった。

1960年に港の外で発見された。日本軍は12月8日の00:41に特殊潜航艇から、真珠湾内の1隻以上の大型軍艦に損害を与えたと主張する無線メッセージを受け取った。

1992年、2000年、2001年に、ハワイ海底研究所の潜水艦は、真珠湾の外側の3つの部分にある5番目の特殊潜航艇の残骸を発見しました。

残骸は、戦後、車両や上陸用舟艇など、多くの余剰の米国の装備が投棄されたがれき場にありました。

その魚雷は両方とも行方不明でした。

これは、軽巡洋艦Stで発射された2隻の魚雷の報告と関連しています。

真珠湾の入り口で10:04にルイ、08:21に駆逐艦ヘルムに魚雷が発射された可能性があります。

攻撃は日本が正式に宣戦布告する前に行われたが、これは山本提督の意図ではなかった。

彼は当初、日本が和平交渉が終了したことを米国に通知してから30分後まで攻撃を開始してはならないと規定した。

ただし、通知が配信される前に攻撃が開始されました。

東京は、5000語の通知（通称「14部メッセージ」）を2ブロックでワシントンの日本大使館に送信しました。

メッセージの書き起こしは、日本大使が予定通りに届けるのに時間がかかりすぎました。

イベントでは、攻撃が開始されてから1時間以上経過するまで提示されませんでした。

（実際、米国のコードブレイカーは、メッセージの配信が予定される数時間前に、メッセージのほとんどをすでに解読して翻訳していました。）

最後の部分は、宣戦布告として説明されることがあります。多くの米国政府や軍の高官は、非常に強力な指標交渉が終了する可能性があり、いつでも戦争が勃発する可能性があると思なしていましたが、宣戦布告も外交関係の切断もしませんでした。

宣戦布告は12月8日の夕方版（米国では12月7日後半）に日本の新聞の表紙に印刷されたが、攻撃の翌日まで米国政府に届けられなかった。

何十年もの間、日本は、戦争を示唆する文書のワシントンへの配達を遅らせた事故と不平を理由に、最初に正式に外交関係を壊すことなく攻撃したと考えられていた。

しかし、1999年、東京の国際基督教大学の井口武雄教授は、交渉を打ち切るという日本の意図をワシントンに通知する方法、そして実際に通知するかどうかについて、政府内で活発な議論が行われていることを示す文書を発見しました。

そして、「私たちの欺瞞的な外交は着実に成功に向かって進んでいる」と言っている戦時日誌の12月7日のエントリを含む戦争を開始します。

このうち、井口氏は「日記には、陸軍と海軍が適切な宣戦布告をしなくなかったことが示されている。

いずれにせよ、日本軍が攻撃の開始前に14部構成のメッセージを解読して配信したとしても、それは外交関係の正式な崩壊または宣戦布告のいずれも構成しなかったであろう。

メッセージの最後の2つの段落は次のとおりです。

このように、日米関係を調整し、米国政府との協力を通じて太平洋の平和を維持し促進するという日本政府の切実な希望はついに失われた。

日本政府は、米国政府の態度を考慮すると、さらなる交渉を通じて合意に達することは不可能であると考えざるを得ないことを、ここに米国政府に通知しなければならないことを遺憾に思う。

淵田美津夫司令官が率いる183機の最初の攻撃波がオアフ島の北で発せれた。

技術的な問題のために6機の飛行機が発進射できなかった。

最初の攻撃には、3つのグループの飛行機が含まれていました。

日本人は2つの波で攻撃しました。

最初の波は、136海里（252 km）で米国陸軍レーダーによって検出されましたが、米国本土から到着した米国陸軍空軍爆撃機と誤認されました。

上：A：フォード島NAS。B：ヒッカムフィールド。C：ベローズフィールド。D：ウィーラーフィールド。E：カネオヘNAS。F：エフMCAS。R-1：オパナレーダーステーション。R-2：カワイロARS。R-3：カアアワRS。G：ハレイワ。

H：カフク。I：ワヒアワ。J：カネオヘ。K：ホノルル。0：本土からのB-17。1：空母打撃群。1-1：レベル爆撃機。

1-2：雷撃機。1-3：急降下爆撃機。2：セカンドストライクグループ。2-1：レベル爆撃機。2-1F：ファイターズ。2-2：急降下爆撃機。

下：A：ウェーク島。B：ミッドウェー島。C：ジョンストン島。D：ハワイ。D-1：オアフ。1：レキシントン。2：エンタプライズ。3：第一航空艦隊。

第1グループ（ターゲット：戦艦と空母）[87]

4つのセクションに編成された800kg（1760 lb）の徹甲爆弾で武装した49機の中島B5Nケイト爆撃機（1機は発射に失敗しました）。

九一式魚雷で武装した40機のB5N爆撃機も4つのセクションに分かれています。

2番目のグループ-（ターゲット：フォード島とウィーラーフィールド）550ポンド（249 kg）の汎用爆弾で武装した51機の愛知D3A急降下爆撃機（3機は発射に失敗しました）

3番目のグループ-（ターゲット：フォード島、ヒッカムフィールド、ウィーラーフィールド、バーバースポイント、カネオヘの航空機）

三菱A6M「ゼロ」戦闘機の航空管制と処罰]（2機は発進に失敗）。

最初の波がオアフ島に近づくと、島の北端近くのオパナポイントで米陸軍SCR-270レーダーによって検出されました。

この投稿は何ヶ月もトレーニングモードでしたが、まだ運用されていませんでした。

オペレーター、Privates George Elliot Jr. ジョセフ・ロツカードは、パールハーバー近くのフォートシャフターの迎撃センターに駐屯している民間のジョセフ・P・マクドナルドに標的を報告した。

しかし、カーミットA.タイラー中尉は、薄く有人のインターセプトセンターで新たに任命された将校であり、カリフォルニアから6機のB-17爆撃機が到着する予定であると推定しました。

日本の飛行機は爆撃機に非常に近い方向（わずかに数度の差）から接近しており、オペレーターはレーダーでこれほど大きな隊形を見たことがなかったが、タイラーにその大きさを伝えることを怠った。

タイラー、セキュリティ上の理由から、飛行機の最初の波がオアフ島に近づくと、彼らはいくつかの米国の航空機に遭遇し、撃墜しました。

これらの少なくとも1つは、やや一貫性のない警告を発しました。

日本の空襲がハワイ時間の午前7時48分に始まったとき（12月8日午前3時18分、木戸部隊の船によって

維持されていた)、港の入り口から離れた船からの他の警告はまだ処理中であるか確認を待っていた)、カネオへの攻撃で。合計353機]の日本の飛行機が2つの波でオアフ島に到着しました。

低速で脆弱な雷撃機が最初の波を主導し、驚きの最初の瞬間を利用して、存在する最も重要な船(戦艦)を攻撃しました。

急降下爆撃機は、最大のヒッカム空軍基地とウィーラーフィールドをはじめ、オアフ島全域の米国空軍基地を攻撃しました。

主な米陸軍空軍戦闘機基地。第2波の171機は、島とフォード島の風上側にあるカネオへ近くの陸軍空軍のペローズフィールドを攻撃しました。

唯一の空中反対は、少数のP-36ホークス、P-40ウォーホーク、および空母エンタープライズからのいくつかのSBDドントレス急降下爆撃機から来ました。

市陸軍基地海軍基地

攻撃されたターゲット：1：USSカリフォルニア。2：USSメリーランド。3：USSオクラホマ。4：USSテネシー。

5：U

SSウェストバージニア。6：USSアリゾナ。7：USSネバダ。8：USSペンシルベニア。9：フォード島NAS。10：ヒ

ツ
カムフィールド。

無視されるインフラストラクチャターゲット：A：石油貯蔵タンク。B：CINCPAC本社ビル。C：潜水艦基地。D：ネイビーヤード。

第1波の攻撃では、落下した49個の徹甲爆弾のうち約8個が、意図した戦艦の目標に命中しました。

それらの爆弾のうち少なくとも2つは衝撃で崩壊し、もう1つは非装甲甲板を貫通する前に爆発し、1つは不発弾でした。

40隻の魚雷のうち13隻が戦艦を攻撃し、4隻の魚雷が他の船を攻撃しました。

米国の船に乗った男性は、警報、爆弾の爆発、銃撃の音に目覚め、目の粗い男性がジェネラルクォーターズの駅に駆け寄ったときに服を着せるように促しました。

(有名なメッセージ「真珠湾攻撃。これは訓練ではありません。」[Nb 16]は、ハワイの最初の上級司令部である哨戒航空団の本部から送られました。)

防御側は非常に準備ができていませんでした。

弾薬ロッカーはロックされ、航空機は妨害を防ぐために翼端から翼端まで開いた状態で駐車しました。

2番目に計画された波は171機で構成されていた：54機のB5N、81機のD3A、36機のA6Mで、嶋崎重和少佐が指揮した。

技術的な問題のために4機の飛行機が進水できなかった。

この波とそのターゲットも3つのグループの飛行機で構成されていました。

第1グループ-550ポンド(249 kg) および132ポンド(60 kg) の汎用爆弾で武装した54個のB5N [87]

27のB5N-カネオへ、フォード島、バーバースポイントの航空機と格納庫、27のB5N-ヒッカムフィールドの格納庫と航空機、第2グループ（対象：空母と巡洋艦）。

550ポンド（249 kg）の汎用爆弾で武装した78個のD3A、4つのセクション（3つは中止）、3番目のグループ - （ターゲット：フォード島、ヒッカムフィールド、ウィーラーフィールド、バーバースポイント、カネオへの航空機）防御と罰のための35のA6M（1つは中止されました）。

2番目の波は3つのグループに分けられました。

1つはカネオへを攻撃する任務を負い、残りは真珠湾攻撃でした。

別々のセクションは、いくつかの方向からほぼ同時に攻撃ポイントに到着しました。

アメリカ人の死傷者と被害

攻撃中のアリゾナ・ネバダは、火事になり、船首に降りて、故意に浜に着く前に港を出ようとしてしました。

ウェストバージニアは、攻撃中に6つの魚雷と2つの爆弾によって沈められました。

真珠湾攻撃への小さな攻撃の犠牲者であるエフ海兵隊の破壊されたヴィンディケーター、それが始まってから90分後、攻撃は終わりました。

2,008人の船員が殺され、710人が負傷した。

218人の兵士と空軍兵（1947年に独立した米国空軍の前に陸軍の一部であった）が殺され、364人が負傷した。

109人の海兵隊員が殺され、69人が負傷した。そして68人の民間人が殺され、35人が負傷した。

合計で2,403人のアメリカ人が死に、1,143人が負傷した。

5隻の戦艦を含む18隻の船が沈没または座礁した。

攻撃が起こったときに戦争状態がなかったことを考えると、攻撃中に殺害または負傷したすべてのアメリカ人は合法的に非戦闘員でした。

アメリカ人の死者のうち、ほぼ半数は、修正された16インチ（410 mm）の砲弾に当たった後の、アリゾナの前方マガジンの爆発によるものでした。

港は後輩の入隊者でした。ネルソン氏は、「海軍の将校は全員家に住んでおり、船に乗っているのは後輩だったので、攻撃の直系で死亡した人のほとんどは非常に後輩だった」と語った。

「それで、誰もがそこで話されている約17または18歳です。」

注目すべき民間人の犠牲者の中には、ホノルルでの爆撃中にヒッカムフィールドに対応した9人のホノルル消防署（HFD）の消防士がおり、歴史上、アメリカの地で唯一の外国勢力による攻撃を受けた消防署のメンバーになりました。

エンジン6の消防士ハリータックリーパンは、日本の砲からの機械銃の火によって格納庫の近くで殺されました。

エンジン4とエンジン1のキャプテンThomasMacyとJohnCarreiraは、日本の爆弾が屋根を突き破った後、格納庫内で炎と戦っている間にそれぞれ死亡しました。

さらに6人の消防士が日本の榴散弾で負傷した。

負傷者は後に、1944年6月13日の平時の行動のためにパープルハート章（元々は武力紛争に参加している間に敵の行動によって負傷した軍人のために予約されていた）を受け取った。

殺害された3人の消防士は、攻撃の43周年にあたる1984年12月7日まで彼らを受け取りませんでした。

これにより、9人の男性は米国の歴史の中でそのような賞を受賞した唯一の非軍事消防士になりました。

このメッセージは、最初の米国の船、セントを示します。

ネバダは、魚雷と船内での火災によりすでに損傷を受けており、港を出ようとしていました。

進行中に多くの日本の爆撃機の標的にされ、250ポンド（113 kg）の爆弾からより多くの攻撃を受け、さらに発砲しました。

港の入り口を塞がないように意図的に浜に打ち上げられました。カリフォルニアは2つの爆弾と2つの魚雷に見舞われました。

乗組員は船を浮かせていたかもしれませんが、ポンプの動力を上げているのと同じように船を放棄するように命じられました。

アリゾナとウェストバージニアからの燃える油が甲板に流れ落ち、おそらく状況は以前よりも悪化したように見えました。

武装解除された標的船ユタは魚雷によって2度穴をあけられました。

ウェストバージニアは7隻の魚雷に襲われ、7隻目は舵を引き裂きました。

オクラホマは4隻の魚雷に襲われ、最後の2隻はベルト装甲の上であり、転覆を引き起こしました。

日本人は戦艦（存在する最大の艦艇）に集中しましたが、他の目標を無視しませんでした。

巡洋艦ヘレナは魚雷で撃沈され、爆風による脳震盪は隣接する機雷敷設艦オグララを転覆させました。

乾ドックの2隻の駆逐艦、カシンとダウンズは、爆弾が燃料バンカーを貫通したときに破壊されました。

漏れた燃料が発火しました。

火事と戦うために乾ドックを氾濫させると、燃えている油が上昇し、両方とも燃え尽きました。カシンは喉のブロックから滑り落ち、ダウンズに向かって転がりました。

軽巡洋艦ローリーは魚雷に穴をあけられました。

軽巡洋艦ホノルルは損傷を受けましたが、使用され続けました。

アリゾナと一緒に係留されていた修理船ヴェスタルは、ひどく損傷し、浜に打ち上げられました。水上機母艦カーチスも被害を受けました。

ハワイにある402機のアメリカの航空機のうち、188機が破壊され、159機が損傷し、そのうち155機が地上にあった]。

基地を守るために実際に離陸する準備ができていない人はほとんどいませんでした。

攻撃中に8機の陸軍空軍パイロットがなんとか空中を飛行し、6機は攻撃中に少なくとも1機の日本機を撃墜したとされた。

ルイス・M・サンダース少尉 フィリップ・M・ラスムッセン少尉 ケネス・M・テイラー少尉 ジョージ・S・ウェルチ

少尉 ハリー・W・ブラウン、少尉。ゴードンH.スターリングジュニア[107] [108] ハワイの33人のPBWのうち、30人が破壊され、攻撃時にパトロール中の3人は無傷で戻ってきました。

フレンドリーファイアは、エンタープライズからのインバウンドフライトからの4機を含むいくつかの米国の飛行機をその上に降ろしました。

攻撃の時、9機の民間航空機が真珠湾の近くを飛んでいました。

これらのうち、3つは撃墜された。

この攻撃で55人の日本人空軍兵と9人が潜水艦で殺害され、1人の酒巻和男が捕らえられました。日本の414機の利用可能な飛行機のうち、350機が襲撃に参加し、29機が失われた。

第1波で9機（戦闘機3機、急降下爆撃機1機、雷撃機5機）、第2波で20機（戦闘機6機と急降下爆撃機14機、さらに74機が対空砲火により地上から撃墜された。

淵田や源田を含む数人の日本の尉官は、真珠湾の残りの軍艦をさらに沈め、基地の整備工場、乾ドック施設、石油タンクヤードに損害を与えるために、南雲に3回目の攻撃を行うように促した。

とりわけ、淵田は戦後数回、この会合について直接説明した。

しかし、一部の歴史家は、これと淵田の後の主張の多くに疑問を投げかけました。

これは、文書化された歴史的記録と矛盾することがあります。

攻撃の計画中に太平洋艦隊を完全に無効にするために3回の攻撃が必要であると意見を述べた源田は、追加の攻撃の要求を拒否した。

アメリカの対空性能は第2攻撃中に大幅に改善され、日本の損失の3分の2は第2波中に発生した。

南雲は、3回目の攻撃を開始した場合、連合艦隊の力の4分の3を危険にさらして、航空機の損失を増やし、残りの目標（施設を含む）を一掃するだろうと感じました。

アメリカの空母の位置は不明のままでした。

さらに、提督は彼の部隊が現在アメリカの陸上爆撃機の射程内にあることを懸念していた。

南雲は、アメリカが彼の空母に対する攻撃を開始するのに十分な生き残った飛行機がハワイに残っているかどうか確信が持てなかった。

第3の波は、かなりの準備と所要時間を必要とし、帰りの飛行機は夜に着陸しなければならなかったことを意味します。

当時、イギリス海軍だけが夜間空母技術を開発していたので、これはかなりのリスクでした。

機動部隊の燃料事情により、彼は後方支援の限界にあったため、真珠湾の北の海域に長く留まることはできませんでした。

そうすることで、燃料が許容できないほど少なくなるリスクがあり、おそらく家に帰る途中で駆逐艦を放棄しなければならないことさえありました。

彼は、2回目の攻撃が彼の任務の主な目的である米国太平洋艦隊の無力化を本質的に満たしたと信じており、さらなる損失の危険を冒すことを望んでいなかった。

さらに、敵を完全に破壊するよりも力を維持することを好むのはIJNの慣習でした。

架空の3回目の攻撃は基地の残りの軍艦に焦点を当てた可能性が高いが、軍事史家は、海岸施設への潜在的な損害が米国太平洋艦隊をはるかに深刻に妨げたであろうと示唆した。

もしそれらが一掃されていたら、「太平洋での深刻な[アメリカ]作戦は1年以上延期されていただろう」[123]チェスター・W・ニミッツ提督、後に太平洋艦隊長の司令官によると、「それは戦争をさらに2年延長したであろう」。
[124]

翌朝、旗艦に乗った会議で、山本は第3波を開始せずに南雲の撤退を支持した。

この攻撃で21隻のアメリカ艦が損傷または紛失し、そのうち3隻を除くすべてが修理されて就役した。

戦艦

アリゾナ（アイザックC.キッド少将の戦艦第1師団の旗艦）：徹甲爆弾4発が爆発し、爆発した。
総損失。1,177人が死亡。

オクラホマ：転覆した5隻の魚雷に襲われた。総損失。429人が死亡。

ウェストバージニア：2発の爆弾、7発の魚雷に襲われ、沈没。1944年7月にサービスに復帰し、106人が死亡しました。

カリフォルニア：2発の爆弾、2発の魚雷に襲われ、沈没。1944年1月にサービスに戻りました。100人が死亡しました。

ネバダ：6発の爆弾、1発の魚雷、浜辺にぶつかった。1942年10月にサービスに戻りました、60人が死亡しました。

ペンシルベニア（ハズバンド・キンメル提督の米国太平洋艦隊の旗艦）：[127]カッシンとダウンズの乾ドックで、USSカッシンからの爆弾と破片が1発当たった、9人が死亡。

テネシー：2発の爆弾に襲われた。1942年2月にサービスに戻りました。5人が死亡しました。

メリーランド：2発の爆弾に襲われた、1942年2月に復帰し、4人が死亡しました（フロート水上機のパイロットが撃墜されたものを含む）。

元戦艦（ターゲット/単三練習船）

ユタ：転覆した2隻の魚雷に襲われた。総損失。64人が死亡。

ヘレナ：魚雷が1つ当たった。1942年1月にサービスに戻りました。20人が死亡しました。

ローリー：魚雷が1発当たった。1942年2月にサービスに戻りました。

ホノルル：ニアミス、軽度のダメージ。サービスを継続しました。

カシン：ダウンズとペンシルベニアの乾ドックで、爆弾1発が当たって燃やされた。

ダウンズ：カシンとペンシルベニアの乾ドックで、カシンから火事になり、燃やされた。

ヘルム：ウェストロックに向かって進行中で、2発のヒヤリハット爆弾により損傷を受けた。

オグララ（機雷敷設艦）：ヘレナに魚雷が当たったことで損傷し、転覆した。

ヴェスタル（修理船）：2隻の爆弾に襲われ、アリゾナから爆破と火災が発生しました。

カーチス（水上機母艦）：爆弾1発、日本の航空機1機が墜落した。

ソトヨモ（港のタグボート）：ショーでの爆発と火災により損傷。

YFD-2（ヤードフローティングドック）：250kgの爆弾による損傷。

真珠湾攻撃の最初の発表は、ホワイトハウス報道官のステイブンアーリーによって、東部時間午後2時22分（ハワイ時間午前8時52分）に行われました。